令和 2 年8月 18 日発行
通巻 214 号

神奈川県立歴史博物館だより No.1

AUG. 2020 Vol.26

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

再開館のご挨拶 ……2
これからの展覧会 ……3
展覧会へのあゆみ
特別展「明治錦絵×大正新版画　世界が愛した近代の木版画」によせて……4
研究余録　小弓公方足利氏と豊臣政権の邂逅をめぐって
―「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」発給の経緯をさぐる―　……6
THE　けんぱく　PUNCH　休館中の博物館活動　……8

再開館のご挨拶

薄井　和男

みなさまこんにちは。神奈川県立歴史博物館長の薄井です。

当館は、新型コロナウイルス感染症の影響により、やむをえず臨時休館をいたしてまいりましたが、緊急事態宣言の解除後、神奈川県対処方針などに従い、6月9日に再開館をいたしました。

あらためて申すまでもなく、新型コロナウイルス感染症の脅威は世界中におよび、人々の暮らしや、経済、文化などあらゆる活動の妨げとなり、また多くの尊い人命を奪い続けております。

当然のことですが、博物館を巡る活動についても感染予防の立場から、多大な支障をきたし、再開館をしても、当分の間、皆様に充分な利用をしていただける状況をつくることがむずかしいとおもわれます。

わたしは当館のような人文系博物館は、来館していただいた皆様に、歴史や文化、芸術に関する実物資料を直接間近にお見せする場であることが、第一義の重要な使命であると考えております。

このたびの新型コロナウイルス感染症の予防対策である、人が密にならないようにすることは、展示資料を存分にご覧いただくことを残念ながら難しくしております。

また展示には常設展と特別展がありますが、特別展には事前からの多くの調整や準備があり、本年度の前半の企画は予定どおり実施することができませんでした。「明治錦絵×大正新版画」は時期を変更し、また、会期を短縮して復活開催することといたしましたが、秋季からは予定どおりの特別展が実施できれば幸いであると考えております。

また、博物館活動には、展示のほかにも各種の講演会・講座・見学会など様々な事業がありますが、これらも人が密にならないようにすることに相反し、計画どおりの実施は難しいと考えます。今後、参加人数や実施方法など十分考慮したうえで、可能なものを行いたいと考えております。

最後に、入館にあたっては手の消毒、検温、マスクの着用など皆様に感染症対策をお願いし、見学導線の設定など平時と異なるご不自由をおかけすることとなりますが、なにとぞご協力いただきますようお願いいたします。

人々がこの感染症に打ち勝ち、平常を取り戻すまで、まだ暫くの時間と我慢が必要ですが、博物館が少しでも皆様の癒しの場になればありがたいと存じます。

（うすい・かずお　館長）

新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のためのお願い

【ご来館にあたってのお願い】

〇次に当てはまる方はご来館をお控えいただくようご協力をお願いいたします。

・マスク（同等品を含む）を着用していない方
・発熱（37.5℃以上）、息苦しさ・強いだるさ、軽度であっても咳・咽頭痛などの症状がある方
・過去2週間以内に感染拡大している国・地域への訪問歴がある方
・感染もしくは感染の疑いのある方が身近にいる方
・10名以上の団体での来館を予定されている方

〇来館されるみなさまには、入館時の検温、マスク（同等品を含む）の着用、手洗い・手指消毒等の基本的な感染予防対策の徹底、対人距離の確保、順路に沿った展示鑑賞、混雑時の入場制限（上限120名）などへのご協力をお願いいたします。

※当館の新型コロナウイルス感染症感染拡大予防対策の詳細は当館ホームページをご覧ください。
http://ch.kanagawa-museum.jp/news/4939

これからの展覧会

再開後には、臨時休館によりいったんは中止とした「明治錦絵×大正新版画」展を復活開催するほか、以下の展覧会の開催を予定しています。
※新型コロナウイルス感染症の感染状況により、予定は変更となる場合があります。最新の情報は、当館ホームページでご確認ください。

■ 特別展「明治錦絵×大正新版画　－世界が愛した近代の木版画－」
2020 年 8 月 25 日（火）～ 9 月 22 日（火・祝）

次のページの「展覧会へのあゆみ」をお楽しみください。

■ 特別展「相模川流域のみほとけ」
2020 年 10 月 10 日（土）～ 11 月 29 日（日）

相模川流域の仏像を中心とした仏教美術を紹介します。神奈川県の中央を流れる相模川沿いには、国府や国分寺が造られ、夢窓疎石や他阿真教といった名僧が往来しました。この地域の仏教美術にスポットをあてた初めての展覧会で、初公開・新発見を含む仏像彫刻を展示予定です。

◀不動明王坐像　国分寺（海老名市）

■ 特別展「かながわの正月
－よい年になりますように－」
2020 年 12 月 12 日（土）～ 2021 年 1 月 24 日（日）

12 月下旬から立春までに行われる様々な行事に焦点を当て、県内各地の多彩な初春の行事を紹介します。新しい年が豊かなものになるように願う人々の活力ある営みを感じ取ってください。

▲大磯の左義長

■ 特別陳列
「出土文字資料からみる古代の神奈川」
2021 年 2 月 6 日（土）～ 3 月 28 日（日）

古代における神奈川の様相について、県内の遺跡から出土した木簡や墨書土器などの文字資料を中心に、都城出土の木簡や文献資料も加え、その在地社会の姿を紹介します。

◀今小路西遺跡出土木簡（複製）

■ 令和 2 年度　かながわの遺跡展
「相模川　遺跡紀行～ 3 万年のものがたり～」
2021 年 2 月 6 日（土）～ 3 月 7 日（日）

※神奈川県教育委員会との共催展示

展覧会へのあゆみ
特別展「明治錦絵×大正新版画　世界が愛した近代の木版画」によせて

角田　拓朗

2020 年 8 月 25 日、待望の特別展「明治錦絵×大正新版画」が開幕します。“ 待望 ” と企画担当者自ら煽るような形容をなすことは、恥ずべきかもしれません。ただこの半年足らずの激動の時を共有した皆様には、およそその心の内はご想像いただけると思います。本来、この館だよりでは展覧会の内容をご紹介すべきでしょうが、既に本展の図録は刊行され、本展特設サイト【図 1】でブログを連載し続けてもおりますから、重ねてのご案内はいたしません。そこで本稿では、本展復活に至る歩みを紹介しつつ、今また新たに思う本展出品作の特徴について、簡単に記したく思います。

【図 1】「明治錦絵×大正新版画」展　特設サイト

振り返れば、本展はまったくもって平坦な道程ではありませんでした。もともと 2017 年春、土井利一氏のコレクションをご紹介いただき、それを核に展覧会を開催しようという “ 点 ” から始まりました。土井氏のコレクションは一級品ではありましたが、量的に考えて展示室を埋められるほどではありませんでした。どうしようかと思案しているうちに、《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》の寄託と孫兵衛の一連の作品との出会いがあり、明治から大正昭和をつなぐ “ 線 ” が見えました。続いて、土井版画店を探索する先にクリスチャン・ポラック氏のコレクションと出会い、世界へというテーマの “ 面 ” へと広がり、本展のかたちとなったことは本展図録にも記したとおりです。文字にすればわずか数行に過ぎませんが、この幸運が重なる展開にただただ驚くばかりでした。なぜなら、正直にいえば、私自身はほとんど身動きがとれなかったからです。2018 年、担当した夏の特別展「真明解・明治美術」の準備と開催に追われていました。2019 年は、台風 19 号により川崎市市民ミュージアムが被災、その後レスキューに参加して年を越しました。そして、気づけば 2020 年 2 月となっておりました。もちろん、それぞれの仕事の合間をみて、本展の実現に向けて遅々とした歩みを重ねてはいました。しかし、気がつけば、開幕まで残り三か月ほどであり、慌てて歩みを再開したのも束の間、新型コロナウイルスの禍が待ち構えていました。時差出勤、在宅勤務などが求められる中、コツコツ事務仕事と図録制作に自らを追い込む日々となりました。そして、4 月―。

多くの方のご協力無くして成り立たないのが、展覧会です。2018 年の展示室内パネルで、展覧会は「奇跡のような催しもの」と記したことがありました。成相肇氏はその言葉に反応して、『芸術新潮』2018 年 11 月号に同展の展評を寄せ、その中で偶然を必然とし何度も繰り返し顕現させるのが学芸員の仕事だという叱咤激励を記していただきました。そのとおりだと素直に反省し、その言葉を励みに、新たな挑戦をはじめました。しかし、このたびの展覧会もまた、私自身の能力以上に多くの方のご助力が重なって実現されたという事実に対して、加えて会期変更で復活開催が可能になったことについて、私の語彙力ではやはり “ 奇跡 ” と表現することしかできないのです。

作品や資料を快くご出品いただいた関係者各位、素晴らしい図録制作にご協力を賜った新生紙パルプ商事株式会社、その他本展にご協力いただいたすべての皆様が、4 月に発表された中止の報を残念に思われたことでしょう。しかしながら、どなたも当館を責め立てることなく、慰労の言葉をかけていただきました。さらに特別展の再開や復活を急き立てることなく、信じてお待ちいただいておりました。このスタンスはまた、本展を見たいと希望した方々も同様だったと思います。中止という告知が出るや否や、見たかったとい

う声や、労りのお言葉を多数頂戴しました。担当者としてはただただ申し訳なく、ありがたく思いました。他方、中止となったことによる事務処理、また中止であるからこそ少しでも内容を残しておこう、届けようという思いで、図録制作の追い込みと中止に伴い内容を増したブログやスマホ対応解説アプリ「ポケット学芸員」【図 2】の制作に明け暮れ、その作業だけであっという間に５月に入っておりました。作業に没頭することで、動揺し続ける心の内側を押さえ込もうとしていたのだと、今さらながら思います。

【図 2】解説アプリ　ポケット学芸員

ブログにも記しましたが、博物館の仕事のひとつに、頭と心の“栄養”を社会に提供することがあります。平時であれば何事もなく提供ができるのでしょうが、非常時において提供することの難しさを強く感じます。人が集い、モノと直に会い、知見を深め、心を潤わせる―そのつながりが絶たれる事態など想像したことがありませんでした。改めて私たちの仕事の社会における必要性について、根底から再考する機会となりました。どうすれば、と館員の多くが戸惑いばかりの二か月ほどを過ごしました。展示が出来なくとも博物館がなすべき仕事―資料・作品を護り伝えること―があること、その本質を再確認することもできました。ただ悲しいことに、６月９日の再開後の姿形は、従前と比べれば来館者の皆様に制約が多く、果たして正しいあり方なのか、個人的に思い悩みもしました。

その思い悩む私を鼓舞し、歩み続けさせてくれたのが、本展に並ぶ作品でした。自粛という日々で先行きが見通せない中、パソコンに残るデータを見て、完成した図録をひらき、もう一度作品が生み出された時代に向き合いました。孫兵衛の作品は、幕末明治初頭の大混乱をこえ、また未知なるアメリカを目指した作品です。その華美な作品から順風満帆な時代相を考えたくもありますが、いまだ政治経済ともども未成熟な明治前半の世に作られた作品たちです。その制作の力強さと美しさは、新しい時代を作ろうとした力強さのあらわれなのでしょう。

土屋光逸は日清戦争・日露戦争を経験し、その後の政治経済の混乱、そして関東大震災を経験した後、新版画の絵師としてデビューしました。ノエル・ヌエットは関東大震災後の東京にたどり着きました。さらに彼は焦土と化した戦後東京も描いています。二人とも、現代と比較にならないほどの混迷・消失・悲哀・絶望などを経験し、制作に臨んだといえます。そんな二人の作品が、雨や川などの水を好み、夜や影などの闇を好むのは必然と言えるでしょう。さらに多色摺木版画という明治末には世から捨てられそうになった技術を用いる点もまた、ノスタルジックな姿勢といえます。そのノスタルジックな技術や主題に、古き良き日を偲ぶという希望とそのかたちがあります。その日々に心を遊ばせることで、見る者たちは温かな潤いを得ることができます。彼らは作品を作ることで、他者を癒やし、自らを慰めたのかもしれません。以上のように、作品が生み出された時代、多色摺木版画を護り伝えようという姿勢は、今の私たちの博物館活動に共通する部分が多々あることに思い至りました。この世の中、満足にできない物事は多々あるものです。ですから、悲観しすぎて歩みをとめることが、危ういのだと気付かされました。そして、今できることを選択し、一歩前に出る勇気を、作品から学んだのです。

待望の復活展示は、８月に開幕します。期間は短くなりますが、その分、より凝縮した展示空間を実現させようと心を躍らせています。もちろん、浮き足だってはいられません。新生活様式に合致した、当館らしい展示はどのように実現できるのか。展示だけではなくご来館の前後にいたるまで、すべてのサービスが十分にご提供できるのか、私たちの模索は続きます。展示ばかりが博物館の歩みではないことも皆様にはご理解いただきたいと強く希望する一方、やはり展示活動こそが皆様と博物館、皆様と作品や資料の大切な接点だとこのたびのコロナ禍で強く認識させられました。そのゴール＝展覧会の実現に向かって、私たちはまた確かな歩みを重ねて参ります。それでは、展覧会で皆様との幸せな出会いが生まれますように！

（つのだ・たくろう　主任学芸員）

研究余録　小弓公方足利氏と豊臣政権の邂逅をめぐって
―「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」発給の経緯をさぐる―

渡邊　浩貴

新収蔵史料「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」と由緒書の存在

神奈川県立歴史博物館の中世歴史部門では、2019年度に（天正18年）7月17日「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」を新規に収蔵することとなりました。小田原合戦の終結直後に発給された本史料は、豊臣秀吉から「鎌倉左兵衛督」（足利頼淳）に宛てた返書で、本文は簡略な内容でありながらも、興味深い情報を多分に含んでいます。まずは本文と書誌情報を以下に示します。

※資料登録名称は「豊臣秀吉朱印状」ですが、小稿では館蔵品の他の秀吉朱印状と区別するために「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」と呼称しています。

【本文】

北条氏政儀加誅戮、就小田原落居、為祝儀、使札并刀一腰給候、御懇志悦覚候、被對北条年来鬱憤之段、無余義候、寔今般仕置満足尤候、猶増田右衛門尉（長盛）・山中橘内（長俊）可申候、穴賢々々、

七月十七日　秀吉（朱印）

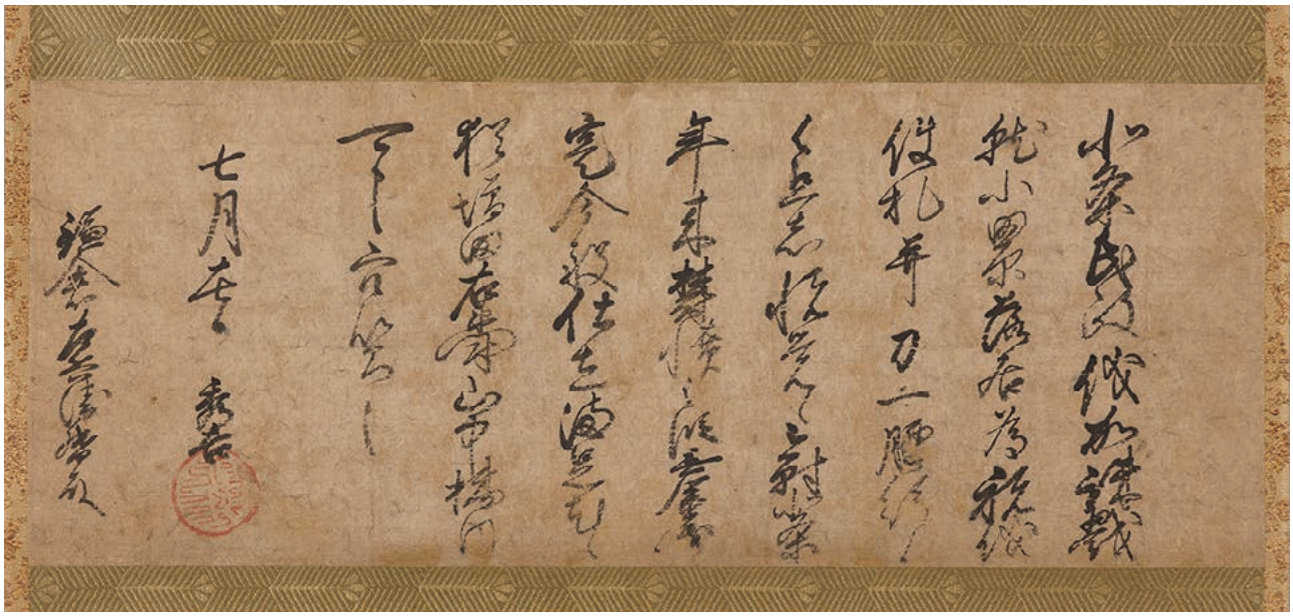
鎌倉左兵衛督（足利頼淳）殿

【書誌】

法量：本紙縦21.4㎝×横54.5㎝。料紙：緒紙。装幀：軸装。元折紙。

本朱印状については、すでに①小田原合戦終結直後における豊臣政権と小弓公方（おゆみくぼう）足利氏（関東足利氏庶流、のちの喜連川（きつれがわ）氏）の接触を示す初見であること、②豊臣政権による関東足利氏の権威を用いた安定的な東国戦後政策の起点ともなりうるものであること、③近世喜連川藩作成の「天明元年目録」に記載されない史料であるため、目録作成以前に家臣筋へ流出して伝来した可能性があること、の３点を筆者は指摘してきました（*1）。

さて、本史料は豊臣秀吉の返書であるため、本史料発給以前の段階で小弓公方足利頼淳側からの書状が秀吉に出されていたことになります。当時の頼淳が置かれた状況をみますと、およそ「公方」と呼べるような政治状況ではありませんでした。古河公方足利高基と争った国府台合戦で小弓公方足利義明が敗死して以降、事実上小弓公方家は滅亡しており、義明子息の頼淳は安房の里見義康のもとに身を寄せていました（*2）。つまり、本朱印状発給の背景において、政治的に逼迫した状況下にある頼淳側が、小田原北条氏滅



（天正18年）7月17日　「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」

亡を契機に豊臣政権へ接触を試みた、という政治動向を想定することができるのです。

ではどのような経緯で足利頼淳は豊臣政権にアプローチをしたのでしょうか。その背景を窺い知ることのできる近世段階の由緒書２通が、実はかつて本朱印状の原本とともに伝来しており、その全容は東京大学史料編纂所影写本「南正吉氏所蔵文書」（架蔵番号3071.36-153）から知ることができます。しかし由緒書の原本自体は、当館が収集した段階ではすでに失われており、現時点で所在は不明です。なお小稿では由緒書そのものの検討に立ち入る紙幅はないため、概要のみの紹介にとどめ、小弓公方側の動向を探ってみることとします。

由緒書と小弓公方家臣南氏一族

由緒書の記載内容を見るに、本朱印状を所持した南氏の庶流である小曽根氏に関わるものと判断されます。史料では、南氏（庶流の小曽根氏）の略歴と本朱印状を所持するに至る功績が記され、冒頭に「南遠江守（宗継）末孫上野国名草と申所ニ罷在候」や「高家ノ一族と申候ハ高・南・大高・小曽根・縣・勧農、此外ニモ大勢御座候」といった内容から書き起こされます。先祖の南与三郎が奥州へ下る小弓公方足利義明に従い、また国府台合戦では与三郎が主君義明とともに討死したこと、そして「南与三郎せかれ三歳ニ而御座候、頼淳公同シ様ニそたち」と与三郎の子息左馬允が足利頼淳の近習として仕え、また里見氏・正木氏とともに小弓公方の家臣団を構成していたことが述べられています。そうしたなか、「左馬允存寄にて小田原落居之節、太閤公へ為祝儀使札以久國ノ刀一腰被送候」とあって足利頼淳側から豊臣政権へ接近したことが記されます。つまり、先述した頼淳側から豊臣政権へのアプローチが、実は南左馬允の発案であったことが主張されるのです。その後、由緒書では左馬允が小弓公方側の使者として小田原在城の豊臣秀吉に対面し、流浪の身となっている頼淳の境遇を語り、その返書として頼淳宛の本朱印状を得て所持に至った旨が書き上げられています。最終的に本朱印状は、南氏の菩提寺である名草の清源寺に他の南氏伝来文書や小曽根氏宛の頼淳官途状とともに納められるに至ったということが語られています。

勿論、由緒書という史料的性格からその記載内容には潤色が施されており、すべてを事実として受け止めることはできません。ただし、頼淳側から豊臣政権へ接触する動きがあったことが認められる記載を含んでおり、先の想定を補強する興味深い歴史史料であると考えられます。

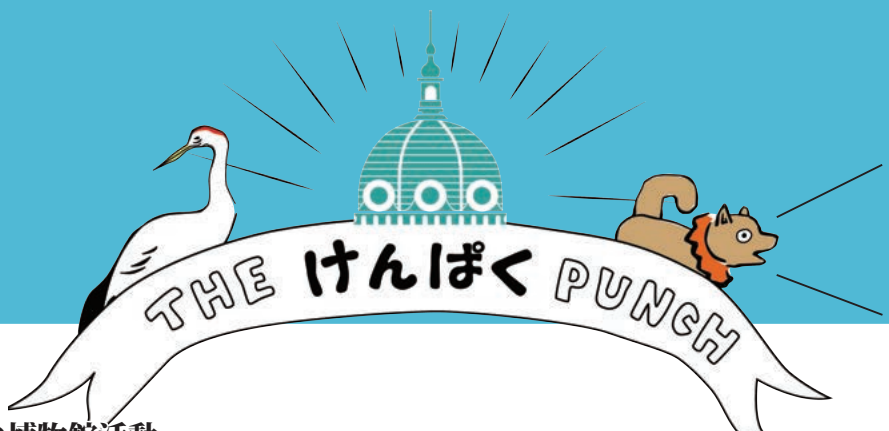
ところで、ここで登場する南氏ないしその庶流小曽根氏はいったいどのような武士なのでしょうか。南氏はもともと高氏の庶流であり、鎌倉期以来、足利氏の被官に連なる系譜で、南北朝期には鎌倉公方の近習も輩出しています。古河公方と小弓公方という関東足利氏の政治的分裂状況下では、それぞれ仕える南氏一族の存在が認められ、古河公方足利義氏には「南図書頭」が、小弓公方足利頼淳には「南美作守」「小曽根右京亮胤盛」が家臣として見出せます。とりわけ頼淳への文書の披露として南美作守は多く登場しており、文禄２年（1593）以降の豊臣政権との交渉では、家臣の南美作守・佐野為綱が窓口になっています。由緒書の「南左馬允」が「南美作守」その人であるかは現段階で未詳ではありますが、小弓公方足利頼淳の家臣団内に南氏や庶流小曽根氏が存在したことから、本朱印状が小弓公方家臣南氏一族のもとへ伝来したことは確かです。であれば、近世喜連川藩の「天明元年目録」以前の段階で、今回の南氏の事例のごとく、早い段階で家臣筋へ流出した小弓公方・喜連川氏関係の文書の存在を想定することは充分可能でしょう。本史料の存在は、かかる戦国末期関東足利氏の文書伝来の様相を究明する上でも非常に大きな意義を有するのです。

小稿は、本朱印状発給の経緯に小弓公方足利頼淳側からの豊臣政権への接触があること、本史料が「天明元年目録」作成以前に小弓公方家臣南氏一族に流出したものであること、の２点を新たに指摘して稿を閉じることとします。

（わたなべ・ひろき　学芸員）

*1　コレクション展示図録『桜井家文書―戦国武士がみた戦争と平和―』（神奈川県立歴史博物館、2019年）、史料紹介「「足利頼淳宛豊臣秀吉朱印状」の紹介―豊臣政権と関東足利氏の再興の視点から―」（『史学』第88巻第３・４号、2020年）。

*2　小弓公方の政治史については、佐藤博信『古河公方足利氏の研究』（校倉書房、1989年）、同「小弓公方足利氏の成立と展開―特に房総諸領主との関係を中心に―」（『歴史学研究』635号、1992年）を参照。



休館中の博物館活動

皆も新型コロナウイルス感染症が猛威を振るうなか、いろいろ大変だったと思うが、当館も特別展「井伊直弼と横浜」の開催期間中だった令和２年３月４日（水）から、感染拡大防止のために臨時休館することになったのじゃ。皆にいつもと変わらず展示を見てもらったり、講座に参加してもらうことができず、ワターシはとてもさびしかったぞ。新型コロナはまだまだ油断できない状況じゃが、６月９日（火）からひさしぶりに開館して皆を迎えることができ、うれしい限りじゃ。ここでは、長い臨時休館中に当館がどんなことをしていたのか、ちょっとだけご覧に入れようかのう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

犬のカメ（以下、カ）：わんわん！パンチの守さま、当館の臨時休館中の取組みといったら、なんといっても「おうちでかながわけんぱく」の公開ですよね。

パンチの守（以下、パ）：お～、カメよ。たしかに、当館は臨時休館中に、おうちで過ごす機会が増えた子どもたち向けに、かながわの歴史に興味を持って、楽しく学んでもらえるよう、ウェブサイトに新たに「おうちでかながわけんぱく」というコンテンツを立ち上げたのじゃ。しかし、カメがこれを推すのは、自分が登場しているからではないのかのぉ～？

カ：わんわん！たしかに、わたしも大活躍しています

▲「おうちでかながわけんぱく」WEB ページ

▲「絵が上手くなる！」WEB ページ

が、内容が充実しているからですよ。当館学芸員のおススメ資料をぬりえに仕立てた「ぬりえでかながわけんぱく」、切って組み立てられる横浜浮世絵のペーパークラフト「組上（くみあげ）」、仏像の服のまとい方を大きな布を使って体験する「ぶつぞうになってみよう（おうちバージョン）」、明治時代の小学生向けの教材を使って絵の描き方の基本が勉強できる「絵が上手くなる！」がアップされています。

パ：そうじゃったのう。短期間によくここまでできたものじゃ。この前、館長に聞いてみたら、４月に立ち上げてから６月末までに 3000 件近くのアクセスがあったそうじゃ。

カ：新たに立ち上げたコンテンツをたくさんの人に見てもらえて、わたしもうれしいです！

パ：うむ、博物館も再開したが、さらにコンテンツを追加する計画もあるようじゃから、これからも「おうちでかながわけんぱく」でおうち時間を楽しんでもらいたいのう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「おうちでかながわけんぱく」
http://ch.kanagawa-museum.jp/ouchi

（丹治 雄一 / たんじ・ゆういち
企画普及課長・学芸員）

発行：神奈川県立歴史博物館　http://ch.kanagawa-museum.jp/　twitter @kanagawa_museum
〒 231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：令和２年８月 18 日　印刷：株式会社 TAKT・JAPAN